

## インドネシア・アチェ州 2004 年インド洋大津波 11 周年追悼祈念関連行事に参加しました (2015/12/22-28)

テーマ：2004 年インド洋大津波

場所：インドネシア国アチェ州バンダ・アチェ市

2015年12月26日、インドネシア国アチェ州にて開催されたインド洋大津波11周年追悼祈念行事に、災害科学国際研究所 情報管理・社会連携部門の桜井愛子准教授とボレー・ペンメレン・セバスチャン助教が参加しました。14,000人以上の犠牲者が眠るバンダアチェ市 Ulee Lheue地区の共同墓地では、地震発災時刻にあわせて犠牲者への追悼の祈りが捧げられました。続いて、バンダアチェ市郊外Lampuuk地区の津波遺構のひとつでもあるRahhatullahモスクで追悼式典が催され、Zaini Abdullah州知事から次の津波に備えて防災教育の重要性が強調されました。26日当日には、シャークアラ大学 津波災害軽減研究センター(Tsunami Disaster Mitigation Research Center :TDMRC)が作成した津波啓発のための一般向けの季刊誌「SMONG」が26日付の新聞折込として、州内の各家庭に配布されました。同紙には、桜井愛子准教授の寄稿「なぜ防災教育が必要か？」がインドネシア語に翻訳され掲載されています。

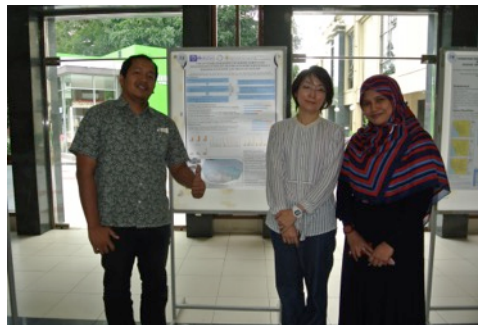
11周年当日の祈念行事への参加に先立ち、桜井准教授は12月22日にシャークアラ大学にて開催されたNational Tsunami Symposium において、大津波から11年が経過したバンダアチェ市内の公立小学校における学校防災の現状と課題に関する研究の成果をまとめたポスター “The 11th Years Assessment on School Safety and Disaster Education at the Public Elementary Schools in Banda Aceh from the 2004 Aceh Tsunami” を発表しました。同研究は、TDMRCや宮城教育大学等の研究者とともに取り組まれています。

大津波から11年が経過したアチェでは、震災後移り住む住民も増え、大津波の記憶の風化が懸念されています。小学校には、津波後に生まれた、あるいは当時乳幼児だった児童が勉強し、学校教員の多くも配置換え等により入れ替わりが進んでいることから、当時の様子や経験を学校で教える機会も少なくなっています。また、外部支援によって進められてきた学校防災が各学校で継続されるための仕組みづくりも求められています。

その意味でも、今回、ボレー助教等が中心となってアチェ津波博物館と協力して立ち上げたアチェ津波デジタルアーカイブ(the Digital Archives of Tsunami in Aceh : The DATA)等のアーカイブと防災教育との連携を進め、次世代へ災害の記憶と経験を伝え、次の災害への備えとなることが期待されます。



バンダアチェ市内に 11 周年祈念式典の広告が掲示されている様子



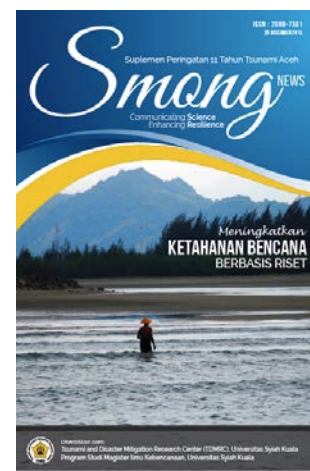
TDMRC の研究パートナーと発表ポスター



共同墓地で祈りを捧げる人たち



祈念式典会場の様子



防災季刊誌 SMONG